

丁字頭勾玉

ちよつ

じ

がしら

まが

たま



奥尻町出土の丁字頭勾玉は、昭和51年、青苗遺跡の発掘調査により、墳墓の中から副葬品として、ガラス玉、水晶玉、水晶の切子玉や鉄製の刀と共に発見されました。

丁字頭勾玉の特徴は、頭部に3本の刻み文様が施されていることです。現在知られているところでは、北海道・東北地方合わせて唯一の発見例という貴重なものであり、大きさにおいても日本有数のものです。

3～6世紀頃の近畿地方において制作され、当時の社会で権力と権威を示すシンボルとして機能していたと考えられています。

平成20年に実施した科学分析の結果、新潟県・糸魚川産のヒスイであることが確認され、奥尻にもたらされたのは、墓の副葬品の特徴から6世紀以降と考えられています。

6～7世紀における奥尻島は、北からはオホーツク文化が渡来し、丁字頭勾玉など南の文化をもたらした人々と、交易を行っていました。

これは、「日本書紀」に記述された^{さいめい}齊明6年（西暦660年）における^{あべのひらふ}阿倍比羅夫の遠征が、この史実を反映したものではないかと推測されています。

このことから、丁字頭勾玉は、奥尻島が南北文化の交流基地として繁栄していた時代を物語る貴重な歴史の証人なのです。